



北海道立文学館所蔵『原文対照 国語読本の教材』 : 翻刻・解説

宇賀神, 一

(Citation)

研究論叢, 29:33-41

(Issue Date)

2023-06-30

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482758>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482758>



北海道立文学館所蔵『原文対照 国語読本の教材』

—翻刻・解説—

宇賀神 一

(西九州大学)

1. 解説

北海道札幌市中心部の繁華街にほど近い中島公園のなかに建てられた北海道立文学館に、国語教育者・児童文学作家として知られる石森延男（1897－1987 年）の旧蔵資料が収められている。「石森延男文庫」と命名されたそのコレクションは、1985（昭和 60）年 5 月、石森からダンボール箱 45 個におよぶ資料の寄贈を受けて成立したものである¹⁾。

石森が北海道立文学館に資料を託した理由は定かでないが、同館は 1980 年代初頭に石森から資料を借り受けて展示会を催しており、その際のつながりによるものと考えられる²⁾。「豊かで美しい石狩平野は、私のふるさとです。藻岩山から見渡される札幌の緑、遠くきらめく日本海、この広々とした大自然に触れると、心が和みます。そして札幌で過ごした遠い日々が、きのうのこのように、思い出されます」という文章や³⁾、『コタンの口笛』（東都書房、1957 年）をはじめとする北海道にまつわる多数の児童文学作品から

読み取ることができる北海道への郷愁とも無関係ではないだろう。ちなみに、同館は彼の生家（札幌市中央区南 6 条西 9 丁目）から直線距離にして 1 キロメートルほどの馴染みの土地に位置している。

「石森延男文庫」には著書、講演記録、日記、書簡などとともに 89 冊のスクラップ・ブックが保管されている⁴⁾。そこには手書きの原稿や雑誌・新聞の切り抜き、出自不明の文書など昭和戦前期から 1980（昭和 55）年ごろまでの多様な資料が収められている。ところどころ資料を剥がした痕跡があり、一体なにが貼られていたのか興味は尽きない。

本稿で紹介するのは、このスクラップ・ブックの“№53”に収録された「原文対照 国語読本の教材」（以下、「対照表」と表記する）という冊子である（図 1）。同資料には、「序に代へて」と目次のほか二段組の文章が記述されており、下段に「国語読本の教材」、上段に教材の原案が掲載されている（図 2）。ここで登場する「国語読本」とは、「サクラ読本」の通称で知られる第 4 期国定国語教科書、すなわち 1933（昭和 8）年度から学年

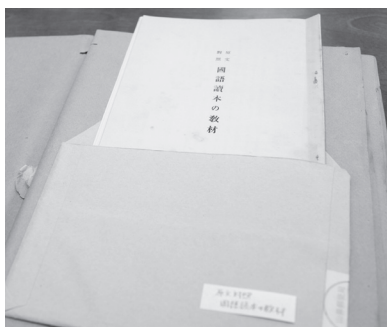


図 1. スクラップブックに収められた「対照表」の様子

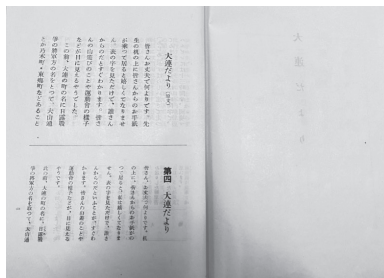


図 2. 「対照表」の一頁

進行で刊行された『小学国語読本』シリーズのことである。「サクラ読本」には「満洲」・支那に関する四つの教材が収録されており、これらはいずれも文部省の依頼により石森が寄稿したものであった⁵⁾。「対照表」にはこの4教材と原案が掲載されている。

表. 「対照表」の所収教材とその原案

刊行年	収録巻	教材名	原案
1936年	巻八	大連だより 朝の大連日本橋	大連だより 朝の大連日本橋
1937年	巻十	「あじあ」に乗りて	「あじあ」に乗って
1938年	巻十二	北京市街	北京見物

〔註〕「朝の大連日本橋」は在満日本人用国語副読本『満洲補充読本』「五の巻」（南満洲教育会編、1928年）からの転用である。「北京市街」は、「支那の印象」という教材の一部である。

「対照表」を翻刻する理由は、第一に、国語教育史上に石森を位置づける手がかりになるためである。石森は第二次大戦後の「文部省にあって『新しい国語科』の出発に旗を振った人」と称される⁶⁾。しかし「太平洋戦争中の石森延男の仕事は軽視または黙殺して、戦後の国語教育に果たした役割だけを評価する」傾向がみられ⁷⁾、戦前の活動を射程に入れた研究の必要性が提起されてきた。

渋谷や磯田一雄によって、戦前石森が編纂に関与した国定教科書・副読本の分析が進められたものの、教材については石森以外の人物の「筆が入っているということを予想させる」こと⁸⁾、すなわち教材と石森が執筆した原案との距離が問題視されてきた。「対照表」はこの点に迫る好個の資料であり、拙稿で一部を分析して、教材化の過程で、1) 原案に由来する叙情表現が削除されて説明的文章に変容したこと、2) 「満洲人」の存在感が周到に弱められ、反対に「満洲」における日本語の広がりや「内地」との物理的近さなどが加筆され、帝国日本の一部としての「満洲」という印象を強める操作がなされたことを明らかにした⁹⁾。

こうした事実は、石森の思想や仕事を意味づけていくうえで重要であるが、手がかりとなる「対照表」は、管見のかぎり北海道立文学館以外に所蔵されておらず確認は容易でない。拙著の批正も含め正確な石森像を描くうえで欠かせない資料であるため、紹介することとした。

第二に、以上の文脈にとどまらず教科書史研究の空白を埋める資料になり得るためである。中内敏夫の言説に倣えば、国定教科書の編纂は「わが監修官の黙して語らぬその舞台裏」の作業であり¹⁰⁾、人知れず「裏」側で進められた国定教科書制度の運用実態はいまだ十分に明らかになっていない。この点に迫る方法の一つが教材の成立史研究である¹¹⁾。「対照表」は、帝国日本の要所であった「満洲」にまつわる内容が、いかにして全国規模で甚大な影響力をもった国定教科書に収録されるに至ったのか、昭和戦前期にどのような「満洲」認識の形成が企図され、それは具体的にいかなる方法によってなされたのかなどを知るよすがとなるはずである。

第三に、「満洲」における教育の特異性が垣間見えるためである。「対照表」は「序に代へて」によれば、山口喜一郎が「満洲」教材の公開授業を行い、参観した教員から原案を囑望する声が聞かれ作成された。注目したのは、「当地の子供には、原文の方がぴつたりひびく」という一文から確認される教材観であり、石森から「原文もお借りして、大連市役所学務課の御厚意によつて」成立したという経緯である。「対照表」が「満洲」の教育実践上いかに使用されたのかは現時点では不明であるが、国定教科書批判とともとれる「原文」志向がみられること、石森が教材の執筆者であることが知られていたこと、公的機関が国定教科書教材の「原文」の公表に関与したことなど、「内地」とは異なる「満洲」教育界の風土を予見させる。

2. 翻刻

凡例

- ・縦書きを横書きにあらためた。
- ・原案部分（上段）のみを掲載し、教材部分（下段）は省略した。
- ・目次頁と原題のみ記された頁は省略した。
- ・改行、句読点、空白などは原則として原本どおりとしたが、みやすさを考慮して一部レイアウトを変更した。
- ・漢字の旧字体は新字体にあらためた。
- ・踊り字は、一文字の繰り返しについては原本どおり「ゝ／ゝ」を用い、二文字の繰り返しは踊り字を用いない表記（例「かちや／＼」→「かちやかちや」）にあらためた。
- ・誤字・脱字についても原本のままとし、本文中に「ママ」と書き添えた。

序に代へて

私の学校で、小学国語読本巻十二の「北京見物」を教へようといふ日に、北京新民学院の山口喜一郎先生が大連に見えたので、先生に此の課を教へていたゞいて、仲間が大勢で見せてもらひ、後で先生の御授業を中心に、色々話し合ひをいたしました。原文の作者である石森先生も見えてゐました。其の時「原文が見たいなあ」と言ふ声がしきりに出ました。「当地の子供には、原文の方がびつたりひびくやうだ」との声も出ました。こんなことが動機で、石森先生から他の三篇の原文もお借りして、大連市役所学務課の御厚意によつて、本文と対照して活字にしたのが此の冊子です。

「私達の居るところのことも出てゐる。」といふことだけで、小学国語読本が、外地の子供達にどれ程親しみを増してゐることです。此の点で石森先生に対して深い深い感謝の意をさゞげたい。同時に此の小冊子をつくつたことによつて、先生の創作された四つの我等の宝を、とにかく一つの匡に収め得たと

いふ喜びをも覚えます。教材研究に、児童読物に、出来るだけ御利用を願へたら幸です。

尚本冊子編輯に色々と骨を折つていたゞいた喜田・久富両君の労を多といたします。

昭和十三年十二月

大連大広場校にて 坂東久松

大連だより（原文）

皆さんお丈夫で何よりです。先生の机の上に皆さんからのお手紙が乗つて居ると嬉しくてなりません。表の字を見ただけで、誰さんからのだとすぐわかります。皆さんの山遊びのことや運動会の様子などが目に見えるやうでした。

この前、大連の町の名に日露戦争の将軍方の名をとつて、大山通とか乃木町・東郷町などあることをお知らせしましたね。それから埠頭が大きくて、一年間に汽船が四千四百隻も出入し、八十六万の人たちが乗下りすることも書きました。町の建物は西洋風で、並木の美しいありさまはお送りした絵葉書でわかつたことと思ひます。

満洲国が出来てからは、こゝが表玄関になつて交通上一層大事な所になつたのです。流線型列車、「あじあ」がすばらしい速さで走つてゐます。新京へは八時間半で、ハルビンには十三時間半、国境マンチュリでさへ一日とはかゝらずに行けます。それに日本内地往復の船が毎日のやうに出て居て、三日目には門司に着きます。出帆するたびに、見送る人々の手から見送られる人々の手にひかれたテープが編物のやうに飾られます。また旅客飛行機で朝立てば夕方には大阪へ、翌朝にはもう東京の土がふめるのです。

初めロシヤ人がこゝを開いた時ダーリニーと呼んでゐました。これは遠い所といふわけですが、今のやうに開けてはダーリニーはなくなりましたね。ロシヤ時代で思ひ出しましたが、その時代に造られた大きな煙突が埠頭

の近くにそびえて居ます。一時は東洋一とまで言われた煙突で、設計はロシヤ人がしたのですが、あまり大きくて造りかねて居ました。そこへちやうど通りあはせた日本の建築技師に、出来るかと尋ねました。すると「ロシヤ人は体が大きいから上から下の方へ築いて行くかも知れないが、我々日本人は体が小さいから、下から上へいくだけでも積重ねて行ける。」と答へて、引受けました。そしてきめられた時日内に見事に作り上げ、皆を驚かせたといふ話も残つてゐます。

その頃日本人は数へるほどしか住んでゐなかつたのですが今では十二万人にもなり、満洲人は十九万人になつて居ます。ですから何処に行つても満洲人の子どもを見受けます。昨日も露天市場を見に行かうとして道がわからなかつたので、そこに居た満洲人の子どもに尋ねますと日本語ではつきりと教へてくれました。電車の車掌さんや市場の売子などになつて一心に働いてゐる子どもも沢山居ます。

大連には星が浦といふ海岸公園があつて、広々した芝生でピクニックをしたり、海水浴をしたりします。満洲は川も湖も少いので奥地に住んでゐる人たちは海がめづらしく、夏にはどつとおしよせます。西洋人も大勢ここへ集つて、色とりどりのテントや海水着で海岸は花が咲いたやうになります。

満洲は雨が少くてこゝに来てから二月余になりますが殆ど降つたことはありません。降つてもすぐからりと晴れ上つてしまひます。ばさばさで赤つぼい土地なのに高粱と大豆はゆたかにみのつてゐます。

空気の乾くせゐで空が高く深いの、内地ではちよつと見られません。ことに星のきれいなことは格別です。今は南の空にさそり座がかゝり、その尻尾のそばに射手座が弓をはつてゐます。頭の上には白鳥座が南へ向つて飛んでゐます。きらきら輝く星の群を見て居ると皆さんが目をぱつちりとして先生を見

て居るやうな気がします。

先だつて遠足で旅順に行つて来ました。そして白玉山の表忠塔を仰いだり、二百三高地に登つたりして、勇ましいお話を聞きました。自分の立つて居る場所にあつたほんたうのお話は胸を打ちました。そのお話はまた次にお知らせしませう。では皆さんお元気で居て下さい。さよなら

十月五日

木村正一

四年生の皆さまへ

朝の大連日本橋（原文）

橋の時計は八時に近い。

其の下に老いたロシヤ人が、パン箱を胸に下げて立つてゐる。

敷石を見つめたまゝ、動かうともしない。

其の前を出勤を急ぐ紳士が通る、勢よくステッキを振り振り靴音を立てて。

すれ違ひに自動車がすべつて来る。

小僧さんの自転車が続く。

電車ががたがたひびいて来る。

橋の下を、鐘を鳴らして貨物列車が行く、

石炭を山程積んで、

白い煙を橋の上に吹散らして。

埠頭の方は、煙やもやで灰色にかすんでゐる。

ロシヤ町波止場の海が赤煉瓦建物のすきから見えて、

ジャンクが静かに浮かんでゐる。

どやどやと苦力の群が橋を渡る。

小ぶとんを丸めて背につけた男たち、

乳のみ子をふところにかゝへた女たち、

ちよこちよこと親たちについて行く子供たち、

ごみごみしたよごれさけた着物・づきん・股引、

日にやけて黒く光る頬の色。

苦力の長い列を横切つて行く小学生、

水色の子供服に真白なエプロン、

背囊をつけて、短いズボン。
旅行鞆と人を乗せた人力車、
荷物をたくさん積んだ馬車。
ホテルの客引がお客を案内して行く。
朝の客車が今着いたらしい。

「あじあ」に乗つて（原文）

十時大連発の「あじあ」に僕は乗つた。見送りにいらした母が、大勢の人にまじつて見える。僕は展望車から母とお別れをした。

「おかあさん、行つた参ります。」

僕が手をあげると母もあげられた。車窓を開くことが出来ないの、此の言葉も通じないらしい。母も何かいはれるがこちらにはわからない。「あじあ」は流れるやうに動き出した。僕は春休みをハルビンの叔父の所へ遊びに行くのである。一度乗つて見ようと思つてゐた此の汽車に乗れて実に嬉しい。

植木鉢には百合の花が咲いて、ゆらゆらゆれながら「ようこそ。」と迎へてゐるやうだ。日の丸の徽章を胸につけた何処かの団体の人たちも乗つてゐる。車掌に尋ねると、

「あの方々は、英国皇帝戴冠式を拝観に行かれるのです。」

と教へてくれた。それから乗客たちに「あじあ」について時速は八二・五軒、全長は一七四米、車体の材料は殆ど国産品であること、流線型にしたわけなどを説明した。

「今金州にさしかゝりました。右手のは大和尚山で関東州第一の高山、左手の丘の碑は乃木勝典中尉の戦死された記念碑であります。金州城が手にとるやうに見えませう。そゝろに乃木將軍の詩もしのばれるのであります。」

畑はよく耕されて、農家がぼつぼつ見える楊の枝に鶺鴒が巢をいくつもかけてゐる。僕はそれを数へてみた。

「何を数へてゐるの。」

肩に手をかけた人がある。見るとロシア人の

女の子だ。

「あの鶺鴒の巢を数へているのさ。」

といつたけれども、鶺鴒といふ日本語がわからないらしい。鳥の巢といつたらすぐにわかつた。此の子は新京の家に母と帰るところで、マルタといふ名だといふ。

「おかあさん、あそこ。」

指さされた所に、緑色の上着を着たロシア婦人がぶ厚な本を読んでゐた。得利寺を通りかけた時、

「お墓が、お墓が。」

とマルタは叫んだ。日露戦争で戦死した露国兵の墓地を見つけたのである。熊岳城が近づいた。

「あの温泉に入つたことがあるの。」

ときくと、去年の夏遊びに来て、砂を掘つて湧き出るお湯につかつたといふ。望小山が見え出したから、その山の伝説を話してやらうといふと、お昼御飯をたべながら母と二人で聞きたいといふ。そこで三人は食堂車に入つた。ロシア少女が給仕をして働いてゐた。

昔母子二人暮らしの家があつた。息子は勉強のため山東へ渡つて行つた。何年かたつてもう帰つてくる頃になつたので、老母は毎日々々望小山に登つて待ちつゝけた。息子は一生涯けんめい苦学したかいがあつて立派な身分になり、いよいよ故郷に帰ることになつた。ところが途中海が荒れて息子は船とともに沈んでしまつた。老母はそんなことはつゆ知らず、風の日も、雪の日も待つてゐたが、つゆに山の上でなくなつたといふ話である。

大石橋で初めて停車した。ここから営口へ行く線がある。マルタとホームに出た。風が冷たい。

「あの山はなんといふ名でせうか。」

「あれは迷鎮山、頂上に廟が見えるだらう。あの廟の祭が娘々祭といつて満洲では一ぱん賑かで、その時はあの山いつぱい着かざ

つた人で埋つてしまふ。」

この廟についてのふしぎな伝説を話してきかせた。車掌がボーイに、

「もう二度、車内の温度をあげてくれたまへ。」

といひつけてゐた。北の方では、三四日前に雪が降つたので、遠い山の峯が白くなつてゐる。なんだか空が曇つて来た。国防上大事な仕事をしてゐる鞍山の昭和製鋼所からは茶色の煙がたちのぼり焰も見えていかにも勇ましい工場だ。まもなく遼陽の白塔が眺められた。おちついた美しい形をして聳えてゐた。太子河の鉄橋を渡る。「あじあ」は防音装置がしてあるので、外の響は車内にはとどかない。太子河はめづらしく水かさが多いが、いつもの濁流だ。行く手の撫順線を軽油動車が走つて行く。

『「あじあ」のスタンプおしませんか。』

ボーイがさういつて来たので、僕はノートに二つおしてもらつた。

奉天についた。此処は安東・撫順・北平の分岐点なので客車がいくつも停つてゐて、苦力が忙しうに荷物を運んでゐる。日かげの所々に雪が消え残つてゐる。奉天はまことに平な町で、ただ北陵の松林が小高くなつて見えるだけである。満洲事変の北大宮の跡がそのまゝに残つてゐるのも車窓からよく見える。奉天で兵隊さんが乗つた。大きな軍刀を持つてゐる。雲が切れて陽かげがさして来た。雲はしきりに流れて早春の畑を野を雲の影がはつて行く。「あじあ」は雲の影を追ひこしたり追ひこされたりして、満洲の背骨をまつしぐらに突進する。どこかの大学生がカメラを持つて来て、車内から外をねらつてゐる。

開原の駅を通過した時、汽車がすれちがつた。ハルビンからの「あじあ」だ。淡緑に白線の車体が向かふのスロープをカーブして行く。なんと美しい線と速度であらう。空はすっかり晴れ上つた。友邦中華民国の晴天白日

旗が思はれた。

四平街に着く。此処からチチハルへ線がつづく。大きな構内には、冬になると大豆が山積するのだ。

兵隊さんが僕のそばに来て

「あそこの丘がわかるかね。あれは公主嶺^{ママ}で、大事な分水嶺なんだよ。昔ロシアのコサツク兵はあの丘で教練してたのだが、今は農事試験場の羊や牛がランニングしてゐる。」

と元気よく話されて、日にやけた顔で笑はれた。向かふの農家に満洲国旗がひらめいてゐるのが見える。そばで働いてゐた満人たちは、鋤の手を休めてほんやりこちらを眺めてゐた。

「汽車の影が長くなつたね。」

とマルタがいふ。汽車の影だけではない。電柱の影も樹の影も煙の影もずつとのびた。「あじあ」は一気に国都新京に迫つた。夕日に映えて遠く国务院や関東軍司令部の建物が光つて見え、新しい住宅や街路樹があざやかだ。兵隊さんは軍刀をかちやかちやさせて下車された。僕がお辞儀をすると勢よく挙手される。マルタも下りて行つた。渡英団体の人たちも下車したので、車内はさびしくなつた。マルタは僕を見送るといふ。母がしきりにマルタに話しかけては僕を見上げるのだが、何をいつてゐるのかわからない。

「さよなら」「さよなら」

マルタはとび上りながら手をふつた。新京からビューローの知つてゐるおぢさんが乗りあはせた。

「一人でやつて来たの。そりやえらい。今北へ旅するのは君だけではない。雁もたくさんシベリヤをさして飛んでゐるよ。」

こんな話から、満洲には水田が多くなつたとか、これは朝鮮人が耕すのであるとか、鉄道の附近は棉をつくるとか、棉の花も美しいが、その実を摘む時、満人の紅い服がなほきれい

だ。鉄道愛護村といつて沿線に住んでゐる人は鉄道を大事に守りお互に助けあひなかよく暮らしてゐるとか、いろいろおもしろいことを聞かせてくれた。日が沈むところだ。大きくて紅くて上海蜜柑のやうだ。夕日と僕との間にはさへぎるもの一つない。明日またお日さまごきげんよう。鳥の群が地上から飛上つた。うす紫の夕空にばら色の細い雲がたなびいた。それを見てゐたら母を思ひ出した。そしてもうしばらく別れてゐるやうな気がした。夕食をすませてから母に手紙を書かうと思つて、食堂車に行つた。テーブルには灯が明かるくともつてゐて、食事を注文すると、ロシア少女の給仕人が僕の顔を見おぼえて、にこにこしながら運んで来てくれた。何処か知らない駅に停車した。大きな樹の上に星が光つてゐた。ビューローのおぢさんは向かふのテーブルで二三人の友達と楽しさうに笑つてゐた。

「あじあ」のマーク入の便箋に手紙を書いて今朝おしてもらつたスタンプを入れてボーイにたのんでしまつたら眠くなつて来た。百合の花はやつぱり首をこくりこくりとゆり動かしてゐる。そこへおぢさんが食堂からもどつて来られた。

「さ、もうぢきだよ。君『あじあ』といふ言葉のわけを知つてゐるかい。これはね、日の出る所といふ意味さ。いゝ名だね。ぢきハルビンだ。昼ならば此処から志士の碑が見えるのだがね。駅に下りたら伊藤博文公の斃れた場所を見て行きたまへ。」

いよいよ「あじあ」はハルビンの町へ入つて来た。百合の花は「さよなら、おやすみなさい。」をしてゐる。時間表通り二十二時半にぴたりと停車した。僕ははいそいそと下りて行くと、突然叔父が

「やあ、よくやつてきたね。」

と声をかけて僕の手を握つた。冬のやうに寒い夜だ。白亜の家の上に三日月がかかつてゐ

る。

北京見物 (原文)

汽車が北京に入ると見上げるばかり大きな城壁にそつて走る。日暮なのでうす暗い城壁の下に杏の花が白つぱく咲いてゐた。停車場はさすがに支那人が多くざわめきも異国風である。駅前には正陽門といふ立派な城門があつて賑やかだ。人力車は歩く人よりも多い。

景山に登つて北京を眺めた。この山は万民景仰の意味で名づけられたといふが北京にはかうした慶ばしい名称がいたる所に見うけられる。宮殿や城門の名はいはずもがなで道路の名風呂屋の名までさうである。景山の頂上から見下した北京は廣廣とした平らな街で、どつしりと根を下してゐるやうだ。

一番目につくのは紫禁城である。こゝは代々の皇居で壮麗な宮殿が幾棟も立並びその黄金色の屋根瓦は碧空に映えて輝しい。四百余州に君臨した皇帝の威光も偲ばれる。今は故宮博物館となつて、すばらしい宝物が藏められ一通り観覧するにも四五日はかゝる。

次に目をひいたのは北海中海南海の池である。黄ばんだ柳に縁どられたこの池は手鏡を地上にならべてはめこんだやうにすがすがしい。夏になると池は蓮の花で埋められるといふから刺繍を眺めるやうであらう。

鼓楼や孔子廟も見える。遠く朝陽門のかなたに通州があり、廣安門の向ふに盧溝橋のあることもわかつた。

北京は城壁でぐるつと囲まれてゐて、東西南北にいくつかの城門がある。いはゞ城門は北京の窓だ。一千年も前にこれほど大きな都市を頭に描きしかも整つた区分をした人は偉いと思つた。北京の美しさは小さな部分的のものではなく、全体として大きな所にあるやうに思つた。例へば内城と外城との面積の割合とか、城壁に釣合つた城門の高さとか、城門にふさはしい幅のある街路とかに比例の

美がうかがはれる。

天を祀ることは支那歴代皇帝の行事であつて、北京には日壇月壇天壇などの祭壇がいくつかある。中でも天壇は名高い。天壇は外城にあつて、まはりには老松が聳え、真昼に松風を聞いてみると、うら寂しいほど閑静であつた。大理石で畳まれた円形の祭壇、旗や幟をたてた石の台大きな篝火たき、犠牲の竈など見て、その昔夜明け前に諸官が参列して、奏楽のうちに天子が祈祷される厳かな様子も思ひ浮べられた。

北京から十軒ばかり離れて万寿山がある。清朝の離宮で豪華な楼閣が麓から峰にかけて構へられ昆明湖といふ清い湖に影をうつして、箱庭のやうにとゞのつてゐる。長廊を渡つたり、石舫に乗つたり、仏香閣に登つたりした。かうして建物を見てみると朱と緑との感じが目だつ。一本の柱にも天井にも扉にもそれが見られる。建築からだけではなくだつたつ広い大きな赤い壁と背景の松、芝生を歩いて来る紅衣の子どもたちもやはりこんな色調である。

昆明湖の水は玉泉山から流れて来る。玉泉山には「天下第一泉」と名づけられた湧水があつて、一口飲むとまことに爽かな味がした。

おもしろいと思つた所は東交民巷と露天市場と胡同である。

東交民巷は各国の大使館区域で周囲は銃眼のついた囲壁をめぐらし外郭を空地にしてある一種の要塞地帯だ。此処は義和団事変の議定書によつて定められたので、支那人の居住を許さない。道路も庭園も建物も洋風なので通つても清々する。首都の真中に自国民の住めない特殊区域のあることは支那歴史の一部が顔を出してゐるやうでおもしろい。

露天市場には日用品のありとあらゆるものが雑多に並べられてゐる。地べたにランプがあり、眼鏡があり、天ぷらの匂ひがたゞよひ、古着屋の軒に小鳥が囀づり、ほこり風は古雑

誌の頁をめくつてゐた。

胡同といふのは路次のことで北京古風の名残をとゞめてゐる。一輪車の水売りが通り、磨ぎ屋、床屋さんも通る。みんなのんびりとした鳴物を鳴らしながら通る。門口から支那少年が風を持つて出て来るとそこにゐた家鴨がよちよちと逃げていく。どこからか花嫁行列のラツパも響いてきたりした。

三月の終りなので北京名物の鳩笛を聞くことができた。飼鳩に笛をつけて飛ばしてやるとかはいらしい音が降ってくる。いかにも鳩が仲よく歌つてゐるやうだ。朝日に羽を光らせながら群れ飛ぶのもなかなかきれいだ。北京の人達はこの鳩笛を耳にして春の近づいたことを喜ぶ。

何百年といふ長い間眠つてゐたこの古都は漸く眼を覚まして新しい空気を吸ひこんで力を出さうとしてゐる。皇軍ニウスをかゝげるアドバルーンや市内あちこちに翻る日章旗などは、北京の新点景である。

【謝辞】 石森氏のご遺族に翻刻と写真の使用をご快諾いただいた。写真に関しては北海道立文学館と札幌市教育委員会の審査を経て掲載に至った。記して感謝申し上げる。

註

- 1) 「北海道文学館のあゆみ」編集刊行委員会編『北海道文学館のあゆみ——道立文学館開館10周年によせて』北海道立文学館、2005年。
- 2) 石森延男「児童と共に」『私のなかの歴史1』北海道新聞社、1983年、142頁。なお、同論の初出は『北海道新聞』朝刊の連載記事（1983年10月3日～12日）である。
- 3) 柴村紀代「石森延男のスクラップから」『ヘカチ』第14号、2019年6月8日、11頁。
- 4) スクラップブックの全体像に関しては、柴村紀代「石森延男のスクラップから」（同上書）を参照のこと。

- 5) 拙著『石森延男研究序説』風間書房、2022年、105-106頁。
- 6) 倉澤栄吉「戦後五〇年の自己史」『現代教育科学』第460号、1995年3月1日、8頁。
- 7) 渋谷孝「解説」『現代国語教育論集成 石森延男』明治図書出版、1992年、482-483頁。
- 8) 磯田一雄『「皇国の姿」を追って』皓星社、1999年、103頁。
- 9) 拙稿『石森延男研究序説』前掲註5)、第4章。同章は拙稿「石森延男と第四期国定国語教科書——『満洲』教材の成立過程」(『国語科教育』第88集、2020年9月30日、12-20頁)の誤記を修正し、さらに分析を進めたものである。
- 10) 中内敏夫『軍国美談と教科書』岩波書店、1988年、30頁。
- 11) ジェンナーに関する教材を検討した中村圭吾(『教科書物語』ノーベル書房、1970年)、軍国美談の改廃理由を明らかにした中内『軍国美談と教科書』(同上書)のほか、国定国語教科書に焦点化した研究として「稲むらの火」に着目した府川源一郎(『「稲むらの火」の文化史』久山社、1999年)、安直哉による一連の研究(『小学国語読本尋常科用教材担当者一覧表』翻刻・解説 私家版、2016年。「『小学国語読本尋常科用卷九』第十七課「図書館」の編纂過程」『岐阜大学国語国文学』第41号、2016年3月(日付不詳)、15-23頁。「『小学国語読本尋常科用卷九』第二十八課「国語の力」の考察」『岐阜大学国語国文学』第42号、2017年3月(日付不詳)、1-15頁。「国定国語教科書教材『小さなねち』の考察」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』第67号巻第1号、2018年10月(日付不詳)、193-200頁。「国定教科書教材『鐵眼の一切經』の考察」『岐阜大学教育学部研究報告 人文科学』第69号巻第1号、2020年10月(日付不詳)、1-9頁)などを参照のこと。